

—特集— 閲覧室の現状と問題点 (その4)

理 学 部

理学部には学部図書室は設置されていない。しかし、9つの学科図書室(附属施設の図書室を除く)が設けられている。

9つの学科図書室名と閲覧席数は、数学科32席、物理学科60席、宇宙物理学科6席、地球物理学科8席、化学科20席、動物学科10席、植物学科6席、地質学・鉱物学科20席、生物物理学科20席、合計182席となっている。昭和42年度大学図書館実態調査では、理学部総計120席であるから5年間に50%の増である。これを各図書室別にみると、42年当時に閲覧席を設けていなかった数学、宇宙物理学、地球物理学科の3図書室は、あらたに設けられ、生物物理学科は学科新設(昭和43年)による増加である。この増加はここ数年の間に、それも大学紛争のあとに増設されているのが特徴である。しかし化学科は40席から20席に減少している。その理由は、図書の増加によって閲覧席数を減らさざるをえなくなったためである。席数が増加した学科図書室も、研究室の一部をさいて閲覧席を設けたところ(植物学科)、また、物置を改造して設けたところ(数学科)があり、動物学科では書庫を改造して収容スペースを広げ、図書の一部を移転してそのあとに席を設けるなど、各学科ともなみなみならぬ努力のあとがみられた。地質学・鉱物学科および物理学科(物理学第1、第2の共有)は新築による増加である。しかし、どの図書室も書庫のスペースは狭く、いずれ年々増加する図書を収容しきれなくなるであろう。その場合、化学科のように、書庫スペースが閲覧スペースに割込むことが考えられるから、今以上に席数が増えることは考えられそうにない。

理学部の学生数(昭和47年5月1日現在)は、大学院生582名、学部学生(教養課程を除く)746名である。大学院生は研究室内に専用机を持っているから、学部学生数746名に対する席数比は約25%であるからまずまずであろう。

一方、大学紛争後に、理学部では学科の管理による「学生控室」が16カ所、約300席が設置されて学生の交流の場を提供している。この「学生控室」が読書場となっているかどうか明らかでない。しかし、そのために図書室の利用、それも自習用の席利用が減少していることは事実のようである。図書室は面積が狭く、職員も1名から3名までという職員数であるために、閲覧部門と書庫の管理、それに整理業務も行なわなければならない現状では、閲覧室だけが独立して、読書施設としての十分な機能(静かで、快適な条件)を保つことは非常に難しい。

理学部のなかで比較的に設備が整ったところの物理学および生物物理学図書室は、閲覧机に仕切りを設け、冷暖房も完備しているためか、利用が集中している傾向がある。そこには、他学部学生も閲覧席だけの利用にきている例もあることから、単に席だけを設ければいいというだけではすまないことを教える具体例といえよう。以上のことから、学科図書室の組織、運営、あり方などについて多くの問題点を含んでいるように考えられる。最後に、物理学図書室の方にまとめてもらったのを紹介しておこう。(編集委員)

物 理 学 図 書 室

物理学図書室は、京大構内北端の5階だてビルディングの4階に位置し、明るく、窓外の眺めがよいことが一つの特徴である。閲覧室は、面積168m²、座席は新着雑誌室として仕切られたソファのコーナーも含めて全部で60、理学部の中ではもっとも大きい閲覧室である。閲覧用机には個別の照明をそなえ、冷暖房設備があり、とくに夏期には満席になることも多い。蔵書は自由に書庫内で見ることのできる開架式であり、気軽に出入できる雰囲気もあって、連日、利用者は非常に多い。図書室の主な利用対象者としては、物理学第1・第2の両教室に所属する院生・教官約300名と考えることができるが、学部学生の利用も多く、その数は、とくに近年理学部において教室を単位とする分属制度が否定されて以来、著しく増加してきた状態である。自習のための閲覧室の利用一つをとってみても、入りやすい2～3の教室図書室に片よっていく傾向もあって、ぜひとも理学部学生を対象とした学生用図書館あるいは閲覧室の確立が望まれる。